

新城「森の広場」

市民観察会

2006.5.14.

主催： 森の広場市民観察会実行委員会(青森市内8団体参加構成)

共催： 新城縁故者委員会

後援： 青森市、東奥日報社、NHK青森放送局



主催8団体： 「青森の自然環境を考える会」「ウオッチング青森」「草と木の会」「樹木医会」「青森野鳥の会」
「森林インストラクター会」「青森自然誌懇話会」「やぶなべ会」

「森の広場」設置の経緯

太平洋戦争後、合浦公園に建設された市営競輪場の郊外移転に選択されたのが新城財産区所有の森林地帯でした。当時新城財産区から譲り受けた森林約53haの内、競輪場建設に要した22haの残存森林の利用法として考えたのが「スポーツその他の多目的広場」だったようです。名称は「森の広場」とし、管理棟、研修室、トイレなどの他、野球場、ゲートボール場などを林野庁補助事業である「生活環境保全整備事業」で整備したもので、管理運営は青森市生涯学習課スポーツ振興チーム所管の施設となりました。しかし、残念ながら利用者は野球同好者だけで、他に山菜採りの人が訪れる程度だったため、周辺の手入れも疎かにされ、せっかく整備したミズバショウ観察路も崩落したままになっています。地元新城の住民ですら知らない場所で長い間眠った状態の施設でした。

この度の青森市内自然愛好諸団体の合同観察会をきっかけに一般市民への啓蒙を計り、将来的には「青森野草園」をも視野に入れた運動に発展できればと考えております。

遊歩道だけは毎年管理を委託されてきた「新城財産区縁故者委員会」の皆様により刈り払いが行われ、歩きやすく整備されております。四季折々の森林浴や草木の観察ルートとしてご利用下されば今回の合同観察会を企画した関係者一同の喜びでもあります。

市民観察会スタッフ一同

森の広場にいるカエルの仲間



アズマヒキガエル

地域的な亜種に分けられています。普段は陸上生活していますが、繁殖期には水辺に集まってきて産卵活動が行われます。卵塊は長い寒天質の紐状で長さは10mにも達するそうです。孵化したオタマジャクシはほとんど分散することなく、集団で過ごし変態を終わった1cm程度の子ガマ達は一斉に上陸する習性があります。夏季林床で子ガマたちの跳ね回るのが見られます。

ヤマアカガエル

早春、未だ水辺の周囲に分厚く残雪が残っている頃、産卵が行われます。親ガエルは水底に潜ったまま皮膚呼吸で越冬しているものと考えられます。カエルの仲間では最も早く産卵が見られ、特定の場所にたくさん集まって産卵するようです。潜水が得意で画像のように水底に長時間潜っています。卵は発見しやすいので卵の発生経過を観察する材料に最適です。



シュレーゲルアオガエル？

近似種の「モリアオガエル」は樹上の枝に泡状の卵塊を産み付けることで知られています。両者の区別は判然としませんが卵はどちらも泡状の中でやや大きい黄白色を呈しています。昨年6月頃、この「森の広場」調整池でも「モリアオガエル」の棲息が確認されました。両種ともニホンアマガエルよりは大きい緑色の美しいカエルです。6～7月頃は遊歩道周辺でも葉上で見られます。

森の広場で見られる可能性がある蝶



ベニシジミ

最も普通のシジミチョウです。日当たりの良い場所が好きで、住宅地の小さな空き地から野山まで明るい場所なら何処にでも現れるでしょう。気温の高い夏には黒っぽい色調になりますが、気温の低い春型の個体は朱色が鮮やかで美しいチョウです。食草はスイバやギシギシなどで雑草を食べてくれます。生活力旺盛でたくましいチョウです。

ツバメシジミ

後翅の先にツバメの尾のような小さな突起があります。♂の翅の表面は青紫色で縁が黒くなっています。♀は黒色に近く尾の付近に橙色の紋があります。裏は白地に黒色と橙色の紋があります。草春から秋まで続けて現れますが、春と秋は多くなります。幼虫の食草はマメ科植物各種のつぼみや花です。越冬は老熟幼虫で落ち葉の裏などに隠れてじっとしています。



キタテハ

ごく普通種で、青森では平地に棲んでいます。成虫で越冬していち早く行動するので早春から雪の消えた日だまりに現れます。種名は黄色のタテハチョウといういみですが、翅の表面は黄色というよりは褐色です。翅の縁にはギザギザがあり、その度合いは夏の個体では弱く秋型の個体では強くなっています。幼虫はカナムグラの食べます。

池に棲む生き物



オオミズスマシ

「森の広場」調整池のような止水域に普通のミズスマシですが、体長は10mm前後と大きく、上翅の側縁後方に棘状の突起があります。ミズスマシ類の目は水面の上と下が同時に見られるように複眼が上下に2分されています。非常にすばやく水面を滑走するので写真撮影は大変です。しかし、水面に何か掴まる場所があれば静止することもあります。

ミズムシ(風船虫)

水中に住む半翅目の昆虫です。オール状に横に張り出した脚ですばやく泳ぎ回ります。体に空気をためる仕掛けがあり、何かに掴まっていなと浮き上がってしまいます。子どもの頃、電灯に飛来したこの虫を捕らえ、水の入ったコップの底に紙片とこの虫を入れると紙と一緒に浮きあがります。浮かばあわてて紙片を放して潜ります。この様子が面白いので「風船虫」と呼ばれて親しまれていました。



スジエビ

「森の広場」調整池の生き物の中では最も利用価値がありそうな生き物です。体長5cm前後に達しますので少し纏めて捕獲できれば食用にもなるでしょう。ほぼ透明な体に赤褐色のスジがあります。淡水域には「ヌカエビ」(通称:ヌマエビ)もいますが、両者が混棲することはなさそうです。水質の悪化には弱く、ジャンプして脱出を計ります。



ミズムシ

水中に棲む少し気持ちの悪い動物かも知れませんが、半翅目の「ミズムシ」と同じなので混乱しますが、こちらの「ミズムシ」は陸上に棲むワラジ虫に似た甲殻類です。体も小さく柔らかいので魚類やトンボのヤゴなどの重要な餌になっています。画像の右側が頭で目も同色です。汚水には強い様です。胎生ですので子どもを産む様子など観察しては如何でしょう。

ヨコエビ

この仲間は陸上から深海に至るまでいろいろな種があるようです。淡水産の種類でも洞窟の中や湧水、河川の中・下流域、池・沼まで広く棲息しています。体長はせいぜい10mm程度です。丁度今頃繁殖期で、水の中には1mmにも満たない小さな仔エビたちが泳ぎ回っています。魚類やトンボのヤゴ達にとっては「ミズムシ」と共に非常に重要な餌資源となっています。



シナイモツゴ

森の広場の池には魚類が棲息していません。シナイモツゴは宮城県の品井沼で発見されたのでこの名があります。以前は東北北部の池沼に広く棲んでいました。しかし、環境の変化で急速に減少した様です。青森市の油川又八沼で1994年再発見され、2000年10月31日、青森市指定の文化財(天然記念物)になっています。魚類が棲息していない、ここの池にも危険分散のため、皆様の同意が得られるならば放流を考えています。

森の広場で見られる主な植物



オトメエンゴサク

エゾエンゴサクに似ていますが近年、青森県内に生えているものはオトメエンゴサクと名前が変更になりました。花の色は白いものからブルーのものまでいろいろ変化があるようです。浅虫湯の島や夏泊半島の大島には大きな群落も見られますが「森の広場」では少ないようです。早春、雪の消えた斜面に横向きにラッパを並べたように咲く様はオトメの名が似合っています。

キジムシロ

日当たりの良い場所に生えている黄色い花の植物です。似た黄色の花に「ミツバツチグリ」があります。花の形は似ていますが、葉の数が5～9枚と3枚(ミツバツチグリ)の違いがあります。「キジムシロ」の由来は葉が広がって座布団状になり、キジが座って休む場所に見立てたものです。画像は開花間近の状態です。



ノアザミ

森の広場では普通に見られる春咲きのアザミです。味が悪いので普通利用はしません。沢地に多いナンブアザミ・サワアザミは美味しいアザミでアザミ汁の1級品です。アザミ類の利用の仕方は、初夏の頃30cm程度に茎の伸びた頃刈り取って茹でて刻んで家族1回分くらいの分量に小分けラップに包んで冷凍保存が便利です。随時アザミのミソ汁が楽しめます。長く伸びた茎の油炒めも美味です。



ミズバショウ

森の広場で5月初旬撮った画像ですが、各地の湿地に生え、花茎は純白の苞に包まれてみどりの葉とのコントラストが鮮やかです。このため、早春の湿地の風物詩として人気があります。ここ「森の広場」でも設立当初は調整池上流のミズバショウ群生地には立派な遊歩道が架けられていました。しかし、訪れる人もなく崩落してしまっています。是非再構築して欲しいものです。

フキ(花)

東北地方では「バツケ」の名称で親しまれており、雪の消え際から現れる「バツケ」の香りと味は長く雪に閉ざされた生活から躍動する春へ向かっての活力を与える食材として利用されています。「バツケ」はフキの株に翌年咲く花で雌花と雄花があり、右の画像は雌花、左下は雄花、繁殖は地下茎で広がり1年目の株に伸びた葉茎を採取して食用とします。バツケ(雌花)の伸びた茎も食べられます。



キブシ

早春、マルバマンサクの次くらいに咲く花で、林縁に見られる低灌木です。葉が出るより先に穂状に垂れ下がるクリーム色の花穂は非常に目立ちます。雌雄異株ですが、その区別点は花の中を下から覗いて見れば分かります。小さい画像の下が♂、上が♀です。昔のご婦人(男性の一部も)は成人すると歯にお歯黒を塗る風習があり、後に既婚・未婚のサインにもなり、その材料に用いられました。



カタクリ

早春、雪の消えた跡にいち早く芽を伸ばし紫色の可憐な花を開きます。青森では浅虫湯の島、浅虫森林公園の「カタクリ」鑑賞に多数の観光客が訪れますが、森の広場にもごく少数の株が見られます。カタクリの花を訪れる「ヒメギフチョウ」は絵になりますが将来森の広場に広葉樹が増え、「カタクリ」の株も増えればその様な光景も観られるようになるかも…

キクザキイチゲ

早春の林床に咲く花で、大きな群落をなし咲き誇る「キクザキイチゲ」は誰しもの目を惹き付けるでしょう。別名「キクザキイチリンソウ」とも呼ばれています。画像のように青色の濃いものから白色まで変化があります。同じ群落内でも色が混じっている場合もあります。葉の切れ込みが深いのが特徴で、アズマイチゲ(葉の先が丸い)と区別出来ます。



ヤマネコヤナギ(バッコヤナギ)

早春、膨らみ始めた花芽は赤い厚い皮の中からネズミ色の毛をまとった美しい花穂が現れます。雪解けの始まった頃の「ネコヤナギ」は早春の華材としても人気があります。雪解けが終わった頃、画像のように細長い葯が伸びてくるのは雄株です。桜の花が咲く頃、長い葯の伸びたバッコヤナギの花もよく目立ちます。



エゾタンポポ

近年、外来種であるセイヨウタンポポに押されて希な存在になっています。「森の広場」の様な郊外では未だ僅かながら「エゾタンポポ」が見られかも知れません。私どもが普通目にしてているタンポポは概ね外来種の「セイヨウタンポポ」です。「セイヨウタンポポ」と「エゾタンポポ」の区別点は花の外側にある総苞外片(みどりの部分)の状態です(反り返っていない)。右上がセイヨウタンポポです。

オシダ

林床に生える大型のシダです。夏の林床に放射状に十数枚の葉を広げるオシダは1枚の葉が長さ60～120cmもあり、湿った林床に豪快に葉を広げています。残念ながら食用の対象にはなりません、鑑賞価値があるので庭園に植えているのも見かけます。昔、キャンプをしながら溪流釣りをやっていた頃、このオシダの葉を集めてテントの中に敷き詰めたら誠に寝心地が良かった記憶があります。



イヌコリヤナギ

コウリヤナギ(コリヤナギ:行李ヤナギ)に似ていますが枝の素性が悪くて役に立たないという意味でこの名が付けられています。しかし、赤い枝にねずみ色のやや小さい花穂は早春の川岸を彩る美しさがあります。葉は長楕円形で丸みがありますので一名マルバヤナギとも呼ばれています。



オオウバユリ

大型のがっしりした植物で、大きく成長した株では高さ1m近くまで花茎を伸ばしてテッポウユリに似たやや緑色の花を15～20個咲かせます。花の終わった花茎にはニワトリの卵よりは少し小さい球形の実を付けます。この実はやがて枯れてたくさんの種子を放出させますが、雪に押しつぶされるまで太い花茎に支えられて残っていますので華材にも使われます。

ツルリンドウ

蔓性の植物で、初秋には可憐な青紫の花を咲かせます。花の終わった晩秋には画像に見られような赤い実を付けます。葉は雪に押しつぶされても常緑のまま残っています。つるはあまり長く伸びることはなく、樹木に絡まって高いところよりは草本類に掴まって地表から少し離れる程度です。早春でも赤い実が残っているのでその存在が分かります。



シュンラン

別名「ホクロ」とも呼ばれますが、針葉樹の林床に咲く蘭科の植物です。常緑の株の間から花茎が伸び、うす緑色の花を開きます。花の色には地域的にいろいろな変化があり、赤い花を付ける株もあるようです。このためシュンラン専門の愛好家も多く、近年盗掘があとを絶ちません。以前はマツ林などで普通に見られましたが現在やや希な存在になってしまいました。



オオバクロモジ

日当たりの良い林道周辺に普通に生えている灌木です。高級和菓子に添付されたりする皮付きのつま楊枝などに加工されます。枝を折れば切り口に芳香があり、森林浴の疲れを癒してくれます。4月下旬～5月始め頃、開葉と同時に黄色の花を付ける。若い枝は滑らかで黄緑色を呈していますが、後に黒い斑点が多くなりほとんど黒色になります。樹皮は香水の原料として利用されます。

タラの芽

「春の木の芽」として人気があります。天ぷら、和え物などにすれば美味です。幹もろとも切り取って5cm前後に切断して水耕すれば発芽します。この性質を利用して営利目的に刈り取る業者が横行しています。スーパーの店頭にも並び、良い値段が付いています。発芽した若芽は山菜採りの目的にされ、いち早くもぎ取られてしまった跡がよく目に付きます。樹木の伐採跡地など荒れ地には繁茂しやすい灌木です。



ツタウルシ

小葉が3枚の蔓性植物でブナやアカマツ壮齢林などでは気根を出して樹幹によじ登っている様子を目にする事が出来ます。アレルギー性皮膚炎(ウルシかぶれ)を起こしやすく、ヤマウルシなどでは普通ウルシかぶれにならない人でも「ツタウルシ」に触れて樹液が付けば軽度ながらも発症する場合があります。付近に高木が無ければ地上一面に蔓を伸ばします。秋には赤く紅葉します。



スミレサイシン

やや大型のスミレで紫色～白色まで色彩の変化があります。しかし、画像のような白色株は比較的少ない様です。スミレサイシンはオオバキスミレとともにスミレの中でも大株になりやすく。山菜としての利用価値もあるそうです。特に地下茎はとろろの様な粘りがあり美味であると言われてます。スミレ類は全て無毒で食べられますが可憐な春の花たちは観賞用に保存したいものです。

ナガハシスミレ

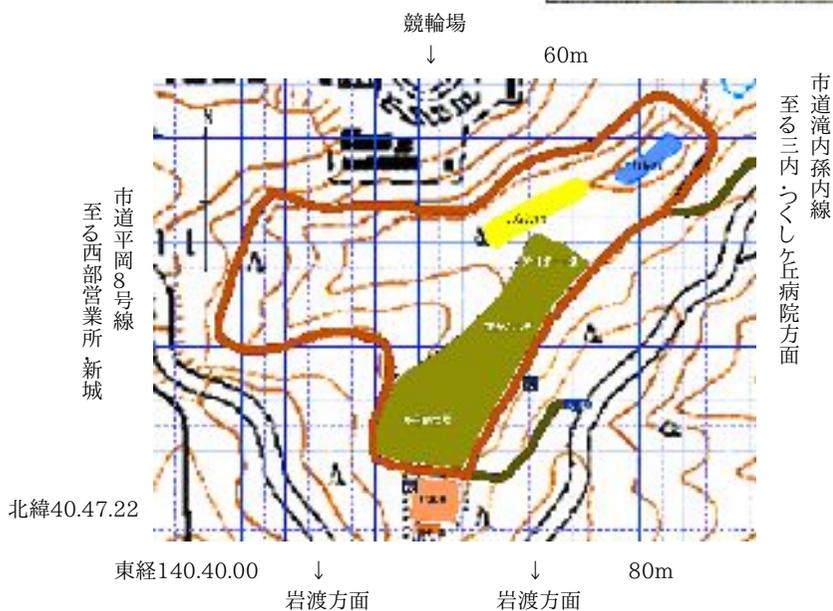
スミレの仲間で距が最も長く別名「テングスミレ」の名もあります。距の形は普通やや水平に伸びていますが上方に湾曲の強いものもあります。他のスミレに比べて距が特に長いので種名の覚え易いスミレです。一見して「タチツボスミレ」に似ていますが、距の長いことで区別できます。



タチツボスミレ

生育環境は広く人家周辺の空き地から山野までごく普通に見られる野生のスミレです。「ナガハシスミレ」と非常に似ていて慣れないと紛らわしい場合もありますが、距の長さや距が水平に伸びているので区別できます。「タチツボスミレ」の「ツボ」は家庭の庭(坪)にも生えるということから名前が付けられたそうです。近似種に「オオタチツボスミレ」というのがあります。

森の広場観察路



自然を見つめる

やぶなべ会

2006.5.10製作

2006.5.15訂正